

追悼

## 永安教授から課せられた宿題

### 諏訪内 敬司

永安教授に初めてお目にかかったのは、私が研究部（当時）に奉職して間もない頃（昭和五十年）だったと記憶しています。当時教授は早稲田大学社会科学部助教授をされており、研究部には嘱託研究員として時々おいでになっていました。というより、学園の近くに居を構えておられましたので、自分の庭に通う感覚で来園されていたのかもしれませんが。同学部の授業は夕方から始まるので（平成二十一年度より昼間に移行する）、午前中に研究部に来て午後大学に行かれることもあったようです。教授は「研究部が本務先、早稲田大学は嘱託先」という意識を持っていた気がします。現在の私のように。本がぎっしり詰まっているであろう大きなシオルダーバッグを背負いながら、電車や奥様の出迎への車を待つ教授の姿を、JR南柏駅で何回も見かけました。寸暇を惜しんで本を読んでおられました。

私が間もなく廣池千太郎元所長の恩師であられた平塚益徳先生の記念事業に携わるようになって、「偉大な学者の著書を編集すると大変勉強になる」とその仕事の意義を強調していただきました。

教育研究室に所属する私が、元々は経済学部出身であることを知られて、経済学を専攻する教授から何か

と親しくお声をかけていただきました。私が学んだ経済学の教授陣に面識がある方もおられ、さらにはいくつかの大学の経済学部の学風や伝統を巡って会話が弾んだこともありました。

先生はすぐにロンドン大学政治経済学院 (School of Economics & Political Science) に客員研究員として留学されました。帰国後、教授とはロンドン大学留学という共通点が増えて、ロンドン大学さらにはイギリスのことなどを語り合う機会を得ました。また、私が一時期山口県に住んでいたことを話すと、隣接の島根県出身の教授とはさらに共通話題が増えました。長州藩（現在の山口県）出身の倒幕志士たちのこと、伊藤博文、山県有朋など山口県出身の歴代総理大臣のこと、島根県津和野や益田のことなどです。

教授はやがて麗澤大学に社会科学系の学部を作るに際してその黒子的役割を担われ、早稲田大学から麗澤大学に転職されました。幅広い人脈を遺憾なく發揮され、学界のそうそうたるメンバーに着任してもらうことができたように思います。残念ながら、私の専門分野と新学部に必要な科目とがマッチせず、私は教授のお手伝いをするのができませんでした。

転職後は研究部に見える回数も断然増えて、大学の研究室よりも研究部で仕事をするが多かったようです。この頃から地方での講演や勉強会の回数を減らして、学部運営やモラロジーのテキスト類執筆に仕事を絞っていかれたように拝察致します。また、研究所の大きな仕事も手がけられるようになり、グラントデザイン設計にも関わったと記憶しています。その一環として、研究部の名称を現在の「研究センター」に変更されました。その際、「研究センター」の前に「道德科学」の四文字を冠すべきだと主張しておられました。また、モラロジー研究所における「道德科学研究センター」の位置付けを重視し、センター独自の建物を建てたい、とも言っておられました。

還暦を迎えた頃、「次々に問題意識が湧いて来て非常に充実している」と仰っておられました。今にして思うと、この頃から時間に追われるように、研究、翻訳、論文・著書の執筆、国際会議開催にと精魂を傾けたことが、結果として寿命を縮めてしまったのではないかと、残念でなりません。糖尿病が悪くなり始めたのもこの頃だったのではないのでしょうか。

晩年に手がけられた仕事の一つに、多田顕先生の書かれた論文を編集して解説をつけ『武士道の倫理——山鹿素行の場合——』（麗澤大学出版会）として出版したものがあります。編注と解説「二つの武士道——山鹿素行と新渡戸稲造——」の分量が全体の半分を占めるといふ行き届いた解説付きの書物です。後者だけでも質量共に単行本に値するもので、教授の武士道観が述べられています。編集途上、私が新渡戸稲造研究をかじっていることから武士道について時々お尋ねがあり、文献の紹介もさせていただきました。新渡戸や内村鑑三のキリスト教観について議論させていただいたことも、懐かしい思い出となりました。

さらに、新渡戸が札幌農学校で学びまた教えていたことと、教授自身が農村出身で農民の向上を目指して東京農業大学で農業経済を学ばれた後、東京大学の経済学大学院に進まれましたので、話題が農業に及ぶこともありました。

ご出身の東京大学経済学部図書館に経済学者・道徳哲学者アダム・スミスの蔵書を集めた「アダム・スミス文庫」があります。アダム・スミス蔵書はスミス研究者である水田洋・名古屋大学名誉教授により、現在世界に約三千冊あることが確認されており、その一割以上がこの文庫に納められて世界的にも貴重なものとして評価されています。それは新渡戸が国際連盟の事務局次長としてヨーロッパに勤務している時に私財を投じて古書店から買ったものを、教授として籍の残っている東京帝国大学に経済学部が誕生することにな

り、そのお祝いにと寄贈したものです（『矢内原忠雄全集 第二十九卷』参照）。そのことを教授に説明すると、新渡戸の先見性に改めて驚いておられました。実は、この蔵書には経済学関係の書籍は無く、歴史、文学、倫理学などの書物だけから構成され、スミスの幅広い関心が表れています。新渡戸の購入直後に、スミスが教授・学長を勤めたゆかりのグラスゴー大学が購入しようとしたが、律儀な店主は先に契約した新渡戸を優先したという因縁付のものです。

教授の学問カバ―領域は大変広く、常に学際的であることを心がけていたように見受けられます。スケールの大変大きな研究者でした。そのことが正当に評価されずに、経済学者からは異端扱いされているようにも思いました。また、単に学問を研究するだけではなく、教育や実践にも気を配っていました。後進の育成に努め、いちいち個人名は挙げませんが、優れた研究者を多く輩出しました。一人前に育つまでは徹底して鍛えたと言っておられました。アルバイト学生にさえ教育しようとしていました。

日本でも牛に肉骨粉飼料を与えたことにより狂牛病が発生した折に、農林省に「自然の摂理に反する飼料の使用は止めるべきだ」という趣旨の提言をファックス送信しておられました。研究室にじっとしているのではなく、行動派でもありました。道徳実践のエピソードとして、若い頃東京の府中で『ニュー・モラル』誌を配布していたら、府中地方の田原道夫氏（現日本道経会副会長）と交錯したという話を伝え聞いたことがあります。また、若い頃には政府関係の仕事にも多々携わったと言っておられました。書齋にとどまることなく、大変エネルギーな、行動派学者であられました。

私の専門である教育学関係のペスタロッチについて、何点かお尋ねになったことがあります。ペスタロッチについては廣池博士が青年教師として若い頃大分県中津で私淑していたことからのご下問かと思っていま

したら、教授の尊敬してやまない難波田春夫先生が、ペスタロッチについて論じているということでした。博学多識の教授でも、幼稚園の創設者フレーベルをご存知なかったのは意外でした。フレーベルはスピノザに始まる汎神論の一つの立場から、万物には一つの永遠の法則が作用しているという万有在神論という考えを持っており、幼児に宿る「神性 (Gottheit)」を進展させるために作られたのがそもそも幼稚園 (Kindergarten) 子どもの園) の始まりだったと説明すると、モラロジにも通じるその重要性を直感され、センターに關係資料が十分に整っていないとして、さっそく著作集や研究書を買って揃えてくださいました。

また、ある時期には「善」についてお考えを深められておりました。「善の問題を論じるには、廣池博士とはまた違った村井実教授の『善さ』の主張 (『善さの構造』講談社学術文庫、『善さ』の復興『東洋館出版』) を無視することはできない」と言われていました。たまたま村井教授は私の恩師であることから、私なりに「善さ」についての村井学説を解説させていただいたことがあります。その問題意識を「道德への善アプローチ」として、『モラロジ研究』第四十九号にまとめられました。

研究センターの部屋が分散した後、本館三階にある教育研究室に自分の机のある私は、隔日勤務で出勤するとセンター事務室 (元の廣池博士記念館) に新聞や雑誌の閲覧に行きます。教授の所属する社会科学研究室がこの建物の中にあり、ときどき教授と出会うことができました。そんな折には、政治、経済、教育などについて議論させていただくことがあり、教授もその機会を楽しんでいる様子でした。また、研究状況について聞かれ、私の手がけている「品性論」と「新渡戸稲造」研究について、是非まとめて書物にするようにと言われました。教授がこんなに早くお亡くなりになるとは夢にも思わず、調べ残しているものがあり時間もなかなか取れないので、私は「そのうちに」と言葉を濁していました。直弟子ではないので厳しく叱責さ

れなかったのをいいことに、未だに見通しを立てていません。お元氣なうちにまとめてご指導を受けるべきだったと後悔しています。今はこの課題を教授から課された遺言とも言うべき宿題として、一日も早くご霊前にお供えしなければならぬと考えているところです。

翻訳書の出版先を紹介していただきながら、本がなかなか売れずにご迷惑をかけたり、「高校の公民教科書を執筆する予定があるので、その際には協力をして欲しい」と声をかけていただきましたが、残念ながらその計画は実現できませんでした。

お亡くなりになった年の六月頃の帰宅途中に、教授宅を訪問させていただきました。心臓が悪くて入院した後だったので、お見舞いに行ったのです。ご家族はご不在で、教授お一人で在宅でした。目がだいぶ不自由になっていると言われていましたが、思ったよりお元氣の様子で安心していましたら、夏にまたご入院されたとの報を得ました。きっとまたお元氣な姿をみせてくれるものと思いい、病院にお見舞いには伺いませんでした。八月中頃でしたか、センターの事務室に電話があり、偶然居合わせた私が受話器を取ると、「三途の川の向こうから、永安です」という声がありました。驚いて私の名を名乗ると、最晩年に文字通り命を削って完成させた『総合人間学モラロジー概論』（モラロジー研究所出版部）を、やはり体調を崩されて入院していた大澤俊夫先生にお届けするように、という言付けでした。教授の準伝統に当たる大澤先生に報告するということを、病床にあっても実行しようとしていたのでしょうか。心なしか力が感じられないことが気になりましたが、間もなくご逝去するとは夢にも思いませんでした。私にとって教授の最後の言葉となりました。

晩年には個人の業績を残すための著書・論文執筆よりも、『倫理道徳の白書 V o 1・1』、『武士道の倫理——山鹿素行の場合——』、『総合人間学モラロジー概論』などの編著書や翻訳書の出版をはじめ、モラロジ

一の社会教育講座の各種テキスト編纂に精力を傾けておられました。執筆の基本姿勢として、最近の若者の文化水準の低下を心配されて、また、留学生にもわかるようにと、漢字を多く使ってルビを付けることを心掛けておられました。決してご自分の考えだけを押し付けず、多くの方の意見を取り入れようとしておられたように拝察致します。視力が落ち始めたため拡大コピーしたパソコン原稿やゲラに拡大鏡を手にして筆を入れたり、音読して文章を直す姿は今も私の脳裏に焼きついています。数千枚はあろうかという膨大な枚数のコピーがセンターに残っています。今は裏紙として利用されて枚数は減りましたが、時々直筆の書き込みが残るコピーを見つけると、こんなにもお仕事をしたのかと胸に迫るものを抑えられません。センターにとって、研究所にとって、否、日本にとって貴重な研究者を失ってしまいました。ご存命であれば、今日の世界的な金融危機にどう対処すべきか、われわれをお導きいただけましたでしょうに。今日の世界各国における金融危機を見ると、「実体経済の伴わない金融やマネー投資にうつつを抜かしているは、必ず破綻する」と今日の来ることを予言していたことを思い出します。

生前のご厚誼に感謝するとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。併せて、宿題を早く提出しなければと、肝に銘じている次第です。